

聖書：マタイ 18：15～20

説教題：二人だけのところで

日時：2019年12月1日（朝拝）

今日の箇所は教会訓練あるいは教会戒規について述べている箇所として有名なところですが、教会の中で罪を犯した兄弟あるいは姉妹がいたら、どうすべきか。その具体的なガイドラインがここにあります。しかし私たちはただこの箇所を単なるマニュアルのように読むと、きっと読み違えてしまいます。この箇所がどういう文脈の中にあるのか、前後関係に注意して読む時に、この教会訓練あるいは教会戒規がどういう視点で考えられているのか大切なことが見えて来ると思います。

18章に入ってまず最初は「だれが一番偉いか」という弟子たちの質問から始まりました。その問いに対してイエス様は3節で「向きを変えて子どもたちのようにならないければ、決して天の御国に入れません」と言われました。社会において見下されている子どもたちのような位置に自分を置く者でなければ、あなたがたは天の御国に入れない。言い換えれば天の御国は立派な人間、偉い人間になって入って行くところではないということ、むしろ貧しい自分を認めて、ただ神の恵みにより頼んで入れていただくところであるということです。ですからそこでは誰一人、一番偉いのは誰かなどとは問いません。偉い人なんか一人もいないからです。そのことが分かった人は自分と同じような小さい人を大事にします。またそういう小さい人々をつまずかせてはならないとイエス様は言われました。そして前回最後の12～14節では、神は迷い出た一匹の羊を大切に追求められる方だと言われました。迷い出た羊とは、ある意味で自分勝手に、自業自得の苦しみに陥っているような、人間社会では大切にされそうにない人々のことです。しかし神はその一匹を大切にします。この流れの中に今日の箇所の御言葉もあります。

15節に「また、もしあなたの兄弟があなたに対して罪を犯したなら」とあります。この「あなたに対して」という部分にはテキストの問題があつて、そのことは後で触れますが、まずここで注目したいのは教会の中に罪を犯した人がいた場合のことです。そういう人がいたら私たちはどうすべきか。もしかすると私たちは教会はその人を罰すべきである、あるいは教会から除き去るべきであると考えられるかもしれません。しかし今見た文脈に沿って考えるなら、罪を犯した人は迷い出た羊にたとえられます。神の御心から外れて、そのままでは神の道から離れて行きかねない羊です。父なる神はその羊に

対してどうされるか。父なる神は、その迷い出た一匹を探し求めて、ご自身との交わりに回復させようとしめます。ですからこの流れで語られている教会訓練は、何よりもその人の回復を目指して行われるものであるということになります。教会訓練あるいは教会戒規は懲罰とか切り捨てのための行為ではないのです。これが大切な視点です。今日は特に 15 節を中心に三つのことを見て行きたいと思います。残りは来週もう一度見たいと思います。

まず第一に見たいのは、兄弟姉妹が罪を犯したのを見たら私たちはどうすべきかということ。15 節に「行って二人だけのところで、云々」と言われています。行くのは誰でしょうか。それは気づいたその人です。牧師や長老ではありません。罪を知ったあなたが行って関わるようにと言われています。これはプロテスタントが告白する万人祭司という聖書の教えと関係します。ローマカトリック教会では司祭などの聖職者のみが神と人との間をとりなす祭司と位置付けられていますが、宗教改革者ルターは、聖書から見てそうでないと思いました。たとえばペテロの手紙第一 2 章 5 節に一般のクリスチャンを指して「聖なる祭司」と言われています。また 2 章 9 節にも、あなたがたは「王である祭司」と言われています。クリスチャン一人一人は、まことの祭司イエス様と結ばれているがゆえに祭司なのです。ですから聖職者のみでなく、私たちそれぞれが他の人を取りなす祭司の働きができるのですし、またそうするように召されています。私たちは自分のことだけ考えて歩めば良いのではなく、お互いのことを心にかけて、相互牧会するように召されているのです。

これは神の家族というイメージで考えてみてもそうです。家族の中に危機的な状況にある人がいるのに、それに無関心な家族があるでしょうか。家族なら、その中の一人が滅びに至るかもしれない危険な状態にあるなら、何とかして助けようとしめます。見て見ぬ振りをして滅びの道をそのまま行かせることをしません。神の家族も同じです。

でもなぜ私が行くべきなのでしょう。万人祭司なら、私ではなく他の人に行ってもらっても良いのではないのでしょうか。しかしイエス様は他の人には言わないで、あなたが行きなさいと言っています。その理由は兄弟の罪を広めないためです。不名誉なことはなるべく人に広めないことが愛であると聖書は言っています。ペテロの手紙第一 4 章 8 節：「愛は多くの罪をおおうからです。」 その具体例として創世記 9 章でぶどう酒を飲んで天幕の中で裸になったノアに対する 3 人の息子たちの態度があげられます。最初

にノアの恥ずかしい姿を発見したのは末の息子ハムでした。彼はそれでどうしたでしょうか。彼は外にいる二人の兄にそのことを告げました。「兄さんたち！大変だ！お父さんが天幕の中で酔っ払って裸になっているよ！見て！見て！」とでも言ったのでしょうか。それを聞いた兄のセムとヤフェテはどうしたのでしょうか。「それで、セムとヤフェテは上着を取って、自分たち二人の肩に掛け、うしろ向きに歩いて行って、父の裸をおおった。彼らは顔を背け、父の裸は見なかった。」 片や人の失態を他の人に告げて恥を広める息子。片や人の不名誉は目に焼き付けないようにし、その状態の速やかな解決に努める息子。どちらが聖書が勧める態度であるかは明らかです。このことのために末の弟ハムは 25 節以降で呪われ、セムとヤフェテは祝福されています。私たちも同じように本当に相手の名誉を思うなら、それを第3者に広めず、逆に覆うようにすべきです。言わなくて済むことなら牧師や長老にも告げない。

さてここで問題にされている罪とはどんな罪でしょうか。先に触れたように、ここにはテキストの問題があります。新改訳 2017 では「また、もしあなたの兄弟があなたに対して罪を犯したなら」となっていますが、「あなたに対して」という言葉は第3版までは本文にありませんでした。そして第3版までは、そこに印がついていて、欄外にこう記されていました。「『あなたに対して』を挿入する異本も多い」と。それが新改訳 2017 になって本文に入るようになり、逆にそこに印がついていて欄外にこう書かれています。「『あなたに対して』を含まない有力な写本もある」。一体どっちなのでしょう。どうも決定的なことを言うことは誰にもできないようです。では私たちはどうしたら良いでしょう。ある人は、2017 の訳に従ってこう考えるかもしれません。ここでは自分に対してなされた罪の場合に、相手の人のところに行くようにとされているのであって、自分と直接関係のない罪に対しては、ここまで関わる必要はないのではないかと。しかし聖書の他の箇所を見ると、そうではないようです。ガラテヤ人への手紙 6 章 1 節：「兄弟たち。もしだれかが何かの過ちに陥っていることが分かったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。」 ヤコブの手紙 5 章 19～20 節：「私の兄弟たち。あなたがたの中に真理から迷い出た者がいて、だれかがその人を連れ戻すなら、罪人を迷いの道から連れ戻す人は、罪人のたましいを死から救い出し、また多くの罪をおおふことになるのだと、知るべきです。」 ですから今日の箇所を読むにあたって、自分に対してなされた罪もそうですが、そうでない罪も含めて考えることが適切だと思います。罪の道に迷い出た人を連れ戻すために、気づいた人、知った人であるあなたが行け！と言われ

ているのです。

2 番目のポイントとして見たいことは、ではその人のところに行って私は何をするのかということです。15 節に「行って二人だけのところで指摘しなさい」と言われています。第 3 版までは「責めなさい」と訳されていました。私たちはここでもう一度、教会訓練の目的を思い出したいと思います。それは一言で言えば相手の回復です。ですから「指摘する」とか「責める」という言葉の意味は、厳しく断罪して相手をボロボロにすることではありません。私たちは他人の悪い点にはすぐ気が付き、それを指摘するのを好むという傾向を持っています。イエス様も山上の説教で、なぜ兄弟に向かって「あなたの目のちりを取らせてください、などと言うのか。見なさい。自分の目には梁があるではないか。」と言われました。そんな私たちが今日の箇所を読んで、イエス様が指摘しなさいと言っているのだから、よ～し一言、言ってやろう！などと行動したら大変です。兄弟を連れ戻すどころか、一層つまづかせてしまう。癒やすどころか滅ぼしてしまう。この「責める」という言葉は、「罪を明らかにする」とか「罪を認めさせる」という意味の言葉です。これは力づくでそうさせるというよりは、相手の人が心からそれを認めることができるように導くという意味でしょう。このことが適切になされるためには、いくつかのことに注意することが必要でしょう。

まず、それは本当に取りあげるべき罪かどうか良く考えなければなりません。もしかすると相手の人は自分でその罪に気が付いて悔い改めに進むかもしれません。すなわち自己訓練です。そうであればわざわざ第 3 者が関わる必要はありません。なのに罪を見つけたと言って、いちいち指摘するのは余計なおせっかいです。この箇所の問題にされているのは、放置したらその人の滅びにつながりかねない罪についてです。何でも首を突っ込むことが奨励されているわけではありません。

また私たちは自分も誤りやすいことを自覚してこの働きにあたらなければなりません。先に引用したガラテヤ書 6 章 1 節に「柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。」とありました。誰かの誤りを指摘することは、ある意味で危険な行為です。やり方を間違えれば、相手は頑固になり、苦々しい感情を持つようになります。そうならず相手に心から誤りを認めるためには、柔和な心で接することが欠かせません。ある人はそのために自分が過去、同じようなことで失敗した経験を思い出すべきであると言っています。そしてその時の自分はどのよう

に正されたいか、どのように訓戒してもらいたいかをよくよく考えるべきであると。その点でパウロの手紙は本当に参考になります。彼はいつも相手に関する感謝や相手の優れた点に関する称賛の言葉から始めます。それによって読者を本当に愛しており、彼らの益に最大の関心があることを時間をかけて説明しています。その後で心にかけている事柄を切り出します。このようなへりくだった人の言葉こそ相手の心に響くものとなるのでしょう。

またここに文字としては書いてありませんが、暗示されていることは、その人は福音を語ることができなければならないということです。ただ罪を指摘すれば問題は解決するわけではありません。罪人たちを赦し、聖め、造り変えて下さるキリストがいて下さるからこそ私たちには望みがあります。ですから関わる人自身、福音に生かされている人として、相手の罪を示すと同時に、キリストにある赦しと回復という福音もセットで語るができる人でなければなりません。

最後3つ目に短く見たいことは、この関わりの結果についてです。二つのケースが考えられます。一つは15節最後にあるように、相手が聞き入れた場合です。これは望ましいケースです。その場合、「あなたは自分の兄弟を得たこととなります」とあります。危機的な状況にあって、もしかすると迷い出たかもしれない人を、自分の兄弟として得ることができた。そうして19節にある通り、二人が心をつ一つにして祈ることができたら、これほど幸いなことはありません。言うまでもありませんが、この段階で成功したなら、もう相手の罪について他言してはなりません。私に関わってあの人がこの罪から立ち直った！と喜びのあまり、他の人に証しとして話してはなりません。愛は多くの罪を覆います。そのためにふたりだけのところで関わったのです。こういう互いの罪を覆う関わりが私たちの間に多く起こるなら何と素晴らしいことでしょうか。またやがての日にその人は何と主から豊かに祝福されることでしょうか。

しかしそのようにはうまく行かない場合、相手が聞き入れない場合もあり得ます。その時は16節以降に示されている次の段階に進むこととなります。「ほかに一人か二人、一緒に連れて」というプロセスに進みます。もちろん私たちは最初の関わりがうまく行かなかったからと言って、機械的に次のプロセスへと進んで行くではありません。目標はあくまでも相手の回復です。そのためにはすべての段階で祈りと忍耐深い関わりが必要とされます。しかしそれを経ても功を奏さない場合、私たちはみことばに示されて

いる手順に従って、さらなる主の導きを求めて行くのです。

この続きは来週に致しますが、今日の箇所から特に心に留めたいことは、私たちはお互いにこのような関わりが求められているということです。「ふたりだけのところで」という言葉に示されている関わりです。一人一人がそうです。その基礎は神が私たち一人一人を大事に追い求めてくださっているということです。神がそういうお方なので、私たちは今、この神の祝福のうちに生かされています。そして私たちがこの状態にあるのは、具体的には多くの兄弟姉妹が私に関わってくださったからではないでしょうか。牧師や教会役員だけでなく、むしろ多くの兄弟姉妹が心にかけて、祈りに裏打ちされた言葉をもって関わってくださり、慰めてくださり、進むべき方向を指し示して、支えてくださったからではないでしょうか。そのように私たちも神の手足となって兄弟姉妹に仕えるように導かれています。最後にもう一度 14 節を読みます。「このように、この小さい者たちの一人が減びることは、天におられるあなたがたの父のみこころではありません。」この神の御心を感謝して受け止めて、私たちも神の良き道具とさせていただきますように。そしてこの素晴らしい神の御心が実現して行くことのために、神と一つ心で仕え、用いていただく神の民の特権と幸いに歩んで行きたいと思います。